

## テーマセッション1

## 家族の介護力を高める援助

長谷川喜代美（群馬県立県民健康科学大学）

## 1. はじめに

高齢者及びその介護家族が質の高い在宅生活を継続するためには、介護保険制度等によるサービスを活用するだけでなく、家族自ら問題に対処してゆく力を高めることが重要であろう。高齢者とその家族に対する援助においては、高齢者本人を含めた家族の持つ顕在化している力・潜在的な力を見極め、力を引き出し強化することが求められる。そして、力を引き出すためには、欠点や問題点の把握のみでなく、その人の持つ強さや対処行動などに着目し、自信や希望を持つことができるよう働きかけることが必要と思われる。また、個々にとって介護経験のもつ意味は文化的規範や価値観と密接に関係していると推察され、その人が満足のゆく介護ができるよう、個々の価値観を尊重することも重要と思われる。

以上をふまえ、筆者が取り組んだ高齢者介護家族に関する研究を素材として、家族の介護力を高めるための援助を検討したい。

## 2. 高齢者介護家族に関する研究結果の概要

介護者の肯定的認識に着目した看護援助に関して

家族介護をしている6事例に対する3～9か月間の家庭訪問援助過程を分析した。介護者の肯定的認識の内容には「介護実践」、「要介護者の健康」、「介護者と要介護者の関わり」、「要介護者と家族の関わり」、「要介護者の療養生活」、「外部資源」、「介護者の家庭生活」、「介護者の社会生活」等があった。また、介護者の肯定的認識を高めるための援助の方向性として、「介護実践力を高めたり、外部資源の活用等により、要介護者の健康状態を良好に保つ」、「介護者がゆとりをもつことができるよう、気分転換できる機会を確保し、そのことが周囲からも支持されるようにする」、「介護の肯定的側面に対する気づきを促す」、が明らかとなった。

介護者の介護に対する思いや価値観に関して

特別養護老人ホーム入所待機家族に対する家庭訪問面接調査の結果(分析対象17人)、介護者の続柄別に以下の特徴がみられた。配偶者では、「介護は自分の使命、自分が最適」、「子に負担をかけたくない」、「経済的に不安」と、介護を通常の夫婦としての役割の連続として捉えながらも将来的不安を抱いているようであった。嫁では、「介護は自分の責任、自分以外にいない」、「家族や親戚が当たり前と思っている」、「感謝や思いやりがない」と、嫁が介護するのは当然という規範が負担感に影響していると思われた。実子では、「介護は自分の使命」、「巡り合わせへの不満」、「嫁ぎ先への遠慮」と、介護を自分の責任として積極的に受入れる、仕方なく受入れる、子の立場と嫁の立場の葛藤など様々であった。

介護の意味は人によって又その時々状況によって異なり、介護をやり遂げるための援助が必要な場合もあれば、介護からの解放のための援助が必要な場合もあると考えられる。

## 3. 討論したいこと

上記の研究は、高齢者と主介護者に焦点をあてたものであるが、家族全体を対象として、家族の介護力を高めるための援助について考えたい。